

商学部京都信用金庫寄付講座

「地域金融ビジネス」について

大学商学部准教授 丸 茂 俊 彦

2008年度春学期に、商学部において京都信用金庫寄付講座「地域金融ビジネス」が開講された。講師陣は、京都信用金庫の方を中心に、京都の中小企業の社長や京都府の職員など多様な面々にご担当いただき、京都における中小企業ビジネスの実態や、それを金融面から支援する地域金融機関の役割、あるいは産学連携支援などの行政サイドの取り組みについて、リレー形式で講義が行われた。講師の中には、大学OBの小倉純氏（理事本店長・78年大学法学部卒）や加藤まなみ氏（松井山手支店長・87年大学文学部卒）などの方が含まれている。

ご存じのとおり、信用金庫や信用組合は、地域経済に密着して中小零細企業や個人を対象にした金融ビジネスを行っている。近年、都市と地方の間での経済格差が大きな社会問題になって

いるが、地域経済の再生と活性化を図るためには、地域に根ざした活力のある企業や産業を育成し発展させることが何より重要である。地域金融機関は、地域に密着した顧客基盤を生かして、単に資金の面だけでなく、経営指導や取引先の紹介など様々な経営支援を総合的に行う「リレーションシップ・バンキング」を実践している。とりわけ、信用金庫や信用組合は、協同組織金融機関という経営形態をとるため、単に営利を求めるのではなく、相互扶助的な精神を基本にして、地域経済の発展のために奉仕、貢献するというコミュニティ・バンク的な経営理念を掲げている。

講義の中では、信用金庫の業務内容からリスク管理手法といった専門的な内容から、顧客本位のサービスに徹するために「おもてなしの心」をキーワード

ードにして新設店舗の発展に取り組み成功した例など、地域金融ビジネスの現実の内容が多数紹介され、学生にも概ね好評のようである。受講生の中から、将来、京都経済あるいは地域経済の発展に尽力する人材が育つことを大いに期待している。

最後に、2008年9月27日（土）に、大学今出川キャンパス明徳館21番教室にて、商学部主催の公開シンポジウム「日本経済と地域金融」（座長・一橋大学・清水啓典氏、パネラー・慶應義塾大学・池尾和人氏、京都府知事・山田啓二氏、財務省・中井徳太郎氏、京都信用金庫・増田寿幸氏）が開催された。地域金融機関の役割、地域力再生、人材育成などのテーマについて活発な討論が行われ、シンポジウム参加者も400人を超えて大変盛況であった。

同志社女子大学表象文化学部
開設記念シンポジウム（10月18日）

2009年4月の表象文化学部英語英文学科、日本語日本文学科の開設を記念し、今出川キャンパスに新しく完成した純正館の柿落としてシンポジウムを開催した。読売新聞社共催。テーマは「言語や文学が表す『こころのかたち』」何を読み解き、どう伝えるか」。

基調講演では、劇作家の平田オリザ氏が、人に話しかけることを例にとりて、お国柄や民族性が表れることを説明され、表象を読み解くとは、言葉の背景にある文化、歴史、民族性を理解することであると説明。「その人がどんなつもりでその言葉を使っているのか」という全体像が「コンテキスト」。

コンピュータはコンテキストを理解することができない。だから言外の気持ちをくみ取る教育が必要であり、表象を通じてコンテキスト理解の訓練を積むことができる。今後、国際的な社会で生きざるをえない中で新学部設置は素晴らしい決断」と表象文化学部への期待を述べられた。

パネルディスカッションでは、俳人の黛まどか氏が「俳句は言語を紡ぎながら、言外の余白を紡ぐ感覚が必要。『こころのかたち』を考える上で余白を理解することが重要で、その心を理解した上で、国際性を考える必要がある」と語り、中央公論新社で編集に携わる渡辺幸博氏は「心の震えを描いて

こそ感動が万人に伝わる」ということを強調された。

表象文

化学部長

に就任予定の吉野政治教授は、「これまでの文学研究は作品を正確に理解し、それを時代や文化の文脈の中で位置づけてきたが、新学部はさらに、作者やその時代の『こころのかたち』を読み解く視点を加え、国際社会の文化的諸問題に応用できる考え方を育成していきたい」と締めくくった。



ベンチャー企業家としての新島と下村

大学名誉教授 北垣宗治

『個儻不羈ことうふの事業家、新島襄と下村孝太郎—時代を生き抜いたベンチャー魂（大学教育出版）』という書名が本書の趣旨を要約している。先駆的な技術者で、大阪舎密工業と大阪瓦斯を指導した下村をベンチャー企業家と見ることは当然だが、著者は同志社の創立者新島襄をも、教育事業家、つまり一種のベンチャー事業家と見做すことを試みた。ベンチャー事業家としての新島の資質に光をあてたことが、本書の斬新な趣向である。

著者の志村和次郎氏は同志社大学法学部の卒業生で、現在ニュービジネスブレイン機構の代表理事である。本書の奥付によると、氏は「ベンチャー企

業支援のほか、新製品開発・新事業プロジェクトのコンサルタントとして活躍中」である。「ヤマハ発動機で生産管理、販売管理の管理職、子会社役員などを経て、経営コンサルタント（中小企業診断士）として独立。中小企業大学の講師などを経て、ソードビジネスコンサルタント代表取締役などベンチャー数社の役員、顧問を歴任した。」そのような経歴の志村氏が同志社の創立者新島襄を見ると、どういう新島像が浮かび上がるであろうか。

著者によれば新島は「教育家、宗教家、政治思想家、そして事業家」である。著者はむろん教育事業家としての新島に焦点を定める。そして新島の財

産は豊富な人脈にあったとする。一般的にいうと、事業が成功するかどうかのポイントは、その事業にプラスとなる人脈をいかに形成するかである。この点において新島はアメリカ留学中に岩倉使節団と接触したおかげで、森有礼、田中不二麿、木戸孝允、青木周蔵らの面識を得たことが、どれほど彼の事業を助けたかは、明らかである。加えて後年には大隈重信、井上馨、渋沢栄一ら政、財界人の協力を得、京都府知事北垣国道から絶大な信頼を得、勝海舟からまで精神的な支援を得ている。

事業家に期待されるのは組織力とリーダーシップである。志村氏は新島の

率先垂範の行動力に注目し、強烈な個性と情熱で組織を引張っていく新島のリーダーシップを重視する。「この創立者なら、一緒に仕事をやっていきたい」と思わせる力が新島に備わっていたというのである。

理念を持たない事業家は通用しない。新島は同志社英学校や同志社大学の趣旨を何通りにも書き残している。ことに「同志社大学設立の旨意」において新島は「一国の良心となるべき人物」を養成するという目的を鮮明にし、それは私学でなければできないという信念を吐露している。志村氏は新島の遺言の中にある「個儻不羈の書生」という言葉に着目し、新島の事業の成功の秘密をそこに見る。のみならず、新島自身が個儻不羈の人物の典型だったのである。

他方熊本バンドの一員である下村孝太郎は、友人たちが牧師となり、また

浮田和民のように学者・思想家となる中で、敢えて理系に進み、新島から激励を受けつつ私費でウースター工科大学、次いでジョンズ・ホプキンス大学に留学した。N.ハリスにも会い、帰校後はハリスの寄付によるハリス理化学校の教頭（つまり校長）として指導力を発揮した。残念ながらハリス理化学校は短命に終わったが、下村は同志社の外に出て、石炭化学の分野での企業家となった。志村氏は下村の新製品開発イノベーションに着目し、彼のベンチャー精神に光をあてる。新島が同志社の理化学教育の指導者として、いかに深く下村に信頼を寄せていたかは、引用されている新島の下村宛の手紙から知ることができる。

本書は下村が同志社の第六代の「社長」として2年間務めたという事実に触れていない（巻末の年譜には下村の社長就任は出ている）。それ以前に

「臨時社長」として二度もかつぎだされた下村が、なぜ正式の社長として登壇するようになったか、そしてその社長職がなぜ2年間という短命に終わったのか、その背景には極めて興味深い理由があるのだが、そういう面を素通りしていることが惜しまれる。本書の校正は残念ながら杜撰といわざるを得ない。ことに引用文に校正ミスが目立つ。2頁にわたる人名索引がついているが、新島と下村の名前はその中にない。外国人名でラーネッドはら行に置くべきで、wの「だ」に入れるべきではない。折角の書物であるから、もう少し丁寧な索引にしてほしかった。以上が私の本書に対する注文である。

第77回日本音楽コンクールの バイオリン部門の本選で2位に入賞

高校教諭 菊地 登

日本で最も権威と伝統があり、クラシック音楽界への登竜門である第77回日本音楽コンクール（毎日新聞社、NHK共催、特別協賛・三井物産）のバイオリン部門において、同志社高校2年の石上真由子さんが第2位、併せて

岩谷賞（聴衆賞）および、全部門の本選出場者の中から選定された者に対し贈られるE・ナカミチ賞を受賞した。本コンクールは2008年9月に118人の参加者によって3回の予選が行われ、本選は10月25日に東京のオペラ



（写真提供 毎日新聞社）

シテイー
で飯森範
親指揮東
京交響楽
団との共
演で、ブ
ラムス
作曲バイ
オリン協
奏曲二長
調作品77
を演奏し
行われ
た。本選

には、東京芸術大学の学生2人と桐朋音楽大学の学生1人と石上真由子さんの4人が参加し、音楽大学の学生に混じり最年少かつ唯一の普通高校生でありながら健闘し、高い技術と音楽性を評価され、なおかつ聴衆の絶賛と票を集めた。予選・本選の様子はNHKのFMおよびBS等で逐次放送された。

受賞の記者会見でも語っていたが「音楽は世界を救う」という信念のもとに勉学と音楽活動を両立させて、病院や施設での訪問演奏や障がい者作業所などの支援を目的としたチャリティコンサート等も熱心に行っている。また、佐渡裕スーパーキッズオーケストラや京都ジュニアオーケストラでコンサートミストレスを務め、演奏だけでなくまとめ役としての才能も発揮している。

同志社女子大学写真コンテスト「SEITONフォトコン」

4月14日(月)～7月11日(金)の約3カ月にわたり、高校生(女子)を対象に、「きずな」をテーマに撮影した作品を募集した。この記念すべき第1回の写真コンテストには全国から280点に及ぶ力作が寄せられ、写真家の今森光彦氏のアドバイスのもと、審査委員会による審査を行い、最優秀賞1作品、優秀賞5作品、入選12作品、そして学校法人同志社理事長および同志社女子大学長による特別審査員賞2作品、計20作品を選出した。最優秀賞には長野県・飯田女子高等学校3年、熊谷英里さんの「ありがとう」が選ばれた。選出された作品の多くは、学校や家庭における、ありきたりの日常がとらえられたもの。一見あたり前の日常の断片に見えても、それぞれの作品は退屈な何かとはほど遠い、人の「きずな」を見出そう、発見しようとする強

いまなぎしに満ちたものばかりであった。特に入賞作品については、写真によつて「きずな」を説明するのではなく、写真というメディアならではの表現特性を生かしつつ、人と人との心の交感を美しく描写した秀作であった。写真文化の担い手は、一般的には男性が中心で、高校生でしかも女子のみを対象とする写真コンテストはおそらく日本で初めての試みだと言える。それゆえにどれだけ作品が寄せられるか当初心配された

が、実際には予想を大きく上回る応募があり、実りある第一回のコンテストとなった。なお、入選作品は現在、女子大学京田辺キャンパス・友和館ヒバードホール2階にて展示している(2009年3月31日(火)まで)。本ホームページ上でも入選作品を公開しているのぜひご覧いただきたい。

最優秀賞



「ありがとう」
熊谷 英里さん
(飯田女子高等学校3年)